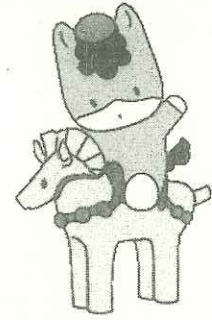


# 東国文化自由研究レポート



## 研究テーマ

土直輪からみる 当時の様子

提出日 2021年8月27日(金)



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 2組 9番

氏名 栗原 ひなた

# 1 きっかけ

私はいままで地理や昔の環境などに興味があり、このレポートを通して当時の日本の様子を知るにはどうすればよいのかを考えたときに埴輪の原材料や質を調べれば当時の様子がわかるのではないかと考えた。そう考え調べてみることにした。また、調べた結果から今との様子や生活と比べることができたらよいと思った。

# 2 調査方法

調査方法は図1のように行った。

まず、埴輪について知るために保渡田古墳群、かみつけの里博物館を見学した。博物館では、職員の方にお話を聞くことができた。パンフレットなどで情報収集をすることができた。古墳群、博物館で写真を入手することができた。

次に埴輪の原材料や種類を調査するべく、インターネットを活用するとともに保渡田古墳群や博物館を見学したことを通して調べた。インターネットでは、群馬県や高崎市などのホームページを閲覧して情報の収集をした。

次に当時の日本の様子について考察を行った。そのために②の調査をしてわかったことを通して考察をした。インターネットも活用し、②と同様群馬県や高崎市などのホームページの閲覧をしてデータや写真の収集を行った。

次に現在の日本の様子と比較した。服や動物など様々なものに着目した。

最後に調査のまとめを行った。これまでの工程で収集した写真やデータを整理し、図表を作成し、レポートにまとめた。

## ① 埴輪の見学、学習

- ▷ 保渡田古墳群
- ▷ かみつけの里博物館 など

## ② 埴輪の原材料や種類の調査

- ▷ インターネットでの調査
- ▷ 見学をして、見たことやわかったことなどを通しての調査

## ③ 当時の日本の様子についての考察

- ▷ ②の結果を通して考察をする
- ▷ インターネットでの情報収集

## ④ 現在の日本の様子と比較

- ▷ 考察を通して現在の日本との共通点や相違点を調べる

図1 調査方法

# 3 内容

## 1-1 埴輪って？

まず、私はこのレポートを作成するに当たって埴輪が作られた理由、意味を知る必要があると考えた。そこでインターネットを利用し、調べてみることにした。

調べた結果、古墳時代の墓である古墳から見つかる人や動物をかたどった土製品を「埴輪」と呼んでいることがわかった。

また埴輪は、日本に特有の器物であるようだ。

日本で最初に書かれた歴史書の一つ「日本書紀」には、天皇が死んだときに生きた人を一緒に古墳に埋めることはあまりにかわいそう、という考えでかわって人の形をした土製の人形を立て並べたものが埴輪である、とかかかっているが、発掘調査によってわかった埴輪のもっとも古いものは壺とこれに乗せる台であることがわかっているため、この話は後で作られたものであると考えられている。

先代の王の霊力を古墳の上で引き継ぐようすを表しているとか、古墳に葬られた人の生前の活躍を表している、葬儀のようすを表しているなどいろいろな説があるが本当のところはまだよくわかっていないようだ。



## 1-2 埴輪の原材料や作る工程

【予想】土を練ったり、今で言う粘土をこねて成形し、焼くことで埴輪ができるのではないかと考えた。

次に埴輪の原材料について調べた。予想を立ててから埴輪の原材料は何かの調査を始めた。私の予想としては土や粘土のようなものからできているのではないかと考えた。なぜなら私は埴輪を見たとき、やきものと似たような工程で作っているのではないかと感じだからだ。博物館へ見学へ行ったとき見た目が土のようなものだったため(図2)土のような原材料を使っていると考えられる。



図2

埴輪の原材料、作る工程を調査するべく、博物館で入手した資料を利用した。その工程は下のようだった。(図3)

- ① 粘土を採取し精選する
- ② 粘土を練って空気を抜く
- ③ 年度紐を積み上げ、埴輪を制作する
- ④ 形のできた埴輪を乾燥させる
- ⑤ 窯を築き、大量の薪を集め、埴輪を焼く

この結果から埴輪を作るにはいくつもの工程があることがわかる。

また、埴輪づくりの専門家がいたそうで、この人は焼き上がった埴輪を古墳に運んできた埴輪工人である。埴輪づくりの専門家がいたほどというのは、埴輪はこの時代には当たり前前の、不思議に思うこともない存在だったのではと考えられた。

図3

また、埴輪は型を用いてつくったものはないといわれている。いくつもの工程があり、型を用いていない、そして埴輪はたくさん作られていることからひとつひとつついでに作っていたのではないかと考えた。

私はなぜここまで埴輪が全国的に広まったのかを不思議に思いインターネットにて調べることにした。

調べた結果、野見宿禰(図3)が日葉酢媛命の陵墓へ殉死者を埋める代わりに土で作った人馬を立てることを提案したところ、天皇が喜びその通りにし、これが埴輪の始まりとされていることがわかった。野見宿禰は殉死者を埋める意味がないと考えたから埴輪を代わりに埋めると提案したそうだ。

私は「野見宿禰」という人物は初めて知ったのでどのような人物なのかを調べた。

野見宿禰という人は図3をみてわかる通りたいへん力の強い人だったが学問にすぐれた、かしこい人でもあったそうだ。



図3 野見宿禰

それから詳しく調べてみると、古代の伝承上の人物で土師連の祖であるそうだ。また「日本書紀(西暦720年)」垂仁天皇7年7月条に、出雲国(島根県)の人で、召されて当麻蹶速と相撲をとり、これを殺して天皇に仕えたとあり、同32年7月条には、皇后日葉酢媛の葬に際し出雲の土部を率い初めて埴輪をつくったとある。だが、伝承上の人物ということもあり、野見宿禰は「日本書紀(西暦720年)」よりも更に数百年前の伝説の話のようで実在していたのかは曖昧な部分が多いそうだ。

### 1-3 埴輪の種類

次に私は、当時の日本の様子を一番表していると考えられる埴輪の形の種類について調査をした。古墳群、博物館を見学したり、群馬県や高崎市のホームページを見たりすると馬の埴輪(図4)が群馬県に多いような気がした。それも昔の群馬県の様子に関わってきていると考えられる。

そこで調べてみると埴輪の種類は大きく分けて5つあることがわかった。

それは、①筒や壺の形をしたもの(図5)、②かぶとやたて・船などの道具の形をしたもの(図6)、③家の形をしたもの(図7)、④馬や鹿(図4)、いのししや鳥などの動物の形をしたもの(図8)、⑤人の形をしたもの(図9)5つ。

また、古墳時代の初めごろは、①筒形のものしかなかったが、時代を経るにつれて埴輪の種類が増え、百舌鳥・古市古墳群の時代には、④動物や⑤人物などたくさんの種類のものが作られたようだ。

図5の埴輪を円筒埴輪といい、古墳時代に古墳の上に樹立された埴輪の一種であり、土管状の形態をしたものである。埴輪の中で一番早く登場した。底はなく(図10)、最初は土器のように中になにか入れることのできるものだと思っていたため、驚いた。

なぜそこがないのか気になって調べてみたところ、もともと壺を載せる器台だったものが、垣根のように並べて配置されるものに変化したため、下部が単純な土器(円筒)状になっているようだ。世界最大の円筒埴輪は約2.5mもあり、大和に君臨したヤマト王権の力の大きさを示している。



図4 馬の埴輪



図5



図6



図7



図9



図8



図10

図6の埴輪は船型埴輪という。船形埴輪は、大阪府や奈良県をはじめとして全国各地でみつがっている。宝塚1号墳の発掘調査でみつがった船形埴輪は、ほぼ完全な形で復元することができ、全長140cmで円筒台を含めた高さ90cm、最大幅25cmと、これまでにみつがっているものの中では最大規模のものだそうだ。

他に類例のない豪華な装飾がほどこされている。装飾がほどこされた船は、古墳石室に描かれた壁画、円筒埴輪に描かれた線画で知られていたが、立体的な形で確認されたのは今回が初めてとなるそうだ。この発見は、古代の葬送儀式で使われた船は権威を示す様々な品物を船上に立てて飾る風習を立体として表現したものとして、学術的に最高水準の資料であると評価されている。

大木を半分に割って中をくりぬいた、丸木舟と呼ばれる船は、縄文時代から使われていた。弥生時代になると、丸木舟を土台としてその上部に部材を足して大型化を図った「準構造船」が造られるようになった。宝塚古墳が造られた、およそ1600年前の古墳時代中期にも準構造船が使われていて、この船は大きな波も乗り越えられるように船首と船尾が大きくせりあがった形をしており、波の荒い外海での航海も可能だった。

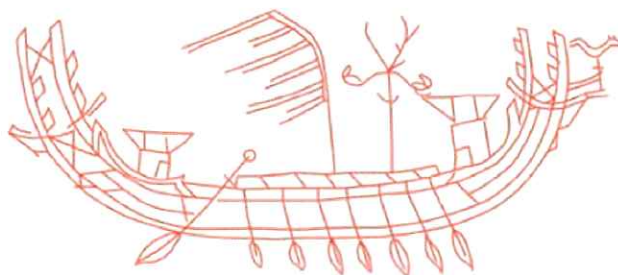


図7の埴輪は家型埴輪といい、埴輪家ともいう。住居の形態を模した埴輪の一種。群馬県の赤堀茶臼山古墳から出土した8個の埴輪は(図11)堅穴住居で、切妻造の屋根に堅魚木をあげた主屋と副屋から成り、地方豪族の住居構成をも示している。宮崎県の西都原古墳からは四方に出入口をつけた子持屋根をもつもの(図12)も出土している。



図11



図12

図4、図8は動物型埴輪という。動物埴輪は水鳥や馬やムササビ、猿などは所有していることを示していて、犬や猪・鹿や鶺鴒いや魚、鷹飼いや、鷹飼いやなどは狩猟そして獲物を主要なテーマとして作られた。鶺鴒は異なる意義があったようで、結界のように世界を分ける意味があったのかもしれないといわれている。鶺鴒形埴輪の存在から、古墳時代には祭礼や行事としての鶺鴒が行われていた可能性が考えられている。

群馬県の動物型埴輪について調べていくと群馬県内で見つがった動物埴輪のうち90パーセントが馬の埴輪、ということがわかった。群馬県内で出土した馬形埴輪は350例以上といわれ、全国的に見ても非常に豊富な数量を誇る。当時、財力や軍事力、権威の象徴で非常に大切な存在であった馬がたくさん飼育されていたそうだ。

このことから、予想のとおり、昔群馬県にはたくさんの馬が飼育されていたことがわかる。群馬県は、先日国の文化審議会から国宝の答申を受けた綿貫観音山古墳出土の埴輪をはじめ、国宝・国指定重要文化財の埴輪の約半数が出土するなど、その数はもちろん、質の高さでも知られ、「日本一の埴輪県」と呼ばれていることもわかった。

図9の埴輪を人物(形)埴輪という。人物埴輪は形象埴輪の一つである。職能集団、楽人集団、饗宴集団、祭祀集団などが表現されている。殉死の代用とか葬列、殯などと解釈されているが、首長権の継承式を表したものとする説が有力である。5世紀代に出現し、とくに6世紀の東国で発達した。

人物埴輪といえば群馬県太田市飯塚町で出土された、国宝の武装男子立像(図13)が有名である。武装男子立像について詳しく知らなかったため調べてみた。

調べてみると唯一の国宝埴輪で甲冑に身を包んだ武人の形をしていることがわかった。細かいところをよく見てみると、甲冑は、鍔や脛当て、靴なども粘土で丁寧に作られていることがわかる。専門家によると、この武人は、小さな鉄板をつなぎ合わせた「挂甲」と呼ばれる作りの甲冑であるとわかった。挂甲は、小さな鉄板をつなぎ合わせるためひもを使っていたことが分かっていたが、この埴輪にも、ひもでちょう結びされたさまが表現されていた。



図13  
武装男子立像

#### 1-4 当時と現在の様子の比較

そこで私は、様々な人物埴輪から当時、どのような人が存在していたのかを考察した。

前橋市出土の琴弾男子椅像(図14)をみると、古墳時代には既に楽器が存在していたことがわかる。また、この埴輪は琴を弾いていて、今も琴はあるのでこの時代から受け継がれていてつながりを感じた。

太田市出土の埴輪、笠をかぶり鍬をかつぐ夫(図15)も、琴弾男子椅像と同様、帽子やネックレスが見られるのでおしゃれを楽しんでいたことがわかる。そこで具体的にどのようなおしゃれをしていたのか、おしゃれをするために使っていたものはなにか気になったため、古墳時代のアクセサリ(図16)を調べてみた。調べてみると古墳時代は弥生時代よりも海外との交流が盛んになったと考えられていて、そのえいきょうが服そうにもあらわれているようだ。



図14  
琴弾男子椅像

たとえば、金メッキの耳かざりやベルト、冠などは、朝鮮半島から伝わり、大変流行った。もちろん、当時の人がみんなふだんから

こういうものを身につけていたとは考えにくく、こうした新しいファッションは、主に自分の古墳を造れるようなえらい人のものだったと考えられている。

当時めずらしかった金のアクセサリをもつことは、その人の力を見せつけるのに役に立っていたのではないかと考えられた。アクセサリの見た目は現在のものとあまり違いはなかった。ベルトは金色でつけているだけで力強い見た目になりそうだなと感じた。ネックレスは重ねつけていたようでアクセサリをしているだけで存在感がありそうだなと考えた。



図16  
古墳時代のアクセサリ



図15  
笠をかぶり鍬を  
かつぐ農夫

つぎに当時の髪型について調べた。調べてみると、比較的上の地位にいた男性たちは、弥生時代につづき「美豆良」(図17)が主流だったそう。これについて一説では、青銅器や鉄が普及し、激しさを増す戦いの際に、カブトと頭の中の緩衝材として衝撃から身を守る目的があったのではないかと、とも言われている。現代の男性はこのような髪型をするひとは珍しいのでこの時代特有の髪型であったとされる。

古墳時代の女性は、弥生後期～古墳時代にかけて邪馬台国を治めたとされる“卑弥呼”に代表されるように「すべしもとどり」「すべらかし」と言われる垂れ髪、もしくは弥生時代からの「古墳島田」に、草花や葉を飾りとしてつけていたそう。女性たちの間でも巫女や貴族、民衆など、身分によって装いに差ができ、男性と同様、高級品である金のアクセサリや冠を使ったヘアアレンジは、身分の高い人たちのみ許されたヘアスタイルであったとされている。女性は垂れ髪、今で言うロングヘアのような髪型は現代でもするため、古墳時代と変わらないと言っても良いが、古墳島田をしているひとは現代では珍しいので美豆良のように時代特有の髪型であったと言える。また埴輪では図19のよ

うになっており、その時代の髪型を忠実に再現していることがわかる。細かく作っている部分は強調したかったのかもしれないという説があるので、アクセサリや楽器は強調したいものの一つだったのだと考える。



図17  
美豆良(角髪)



図18  
古墳島田



図19



図20  
矢の刺さった鹿

群馬県高崎市の太子塚古墳(5世紀前後)で、矢が刺さり血を流しているシカの埴輪(図20)が見つかったそう。専門家によると、矢が刺さったイノシシの埴輪は約2キロ離れた保渡田遺跡で発掘されているが、シカでは初めてとみられる。血は描いてあるそうで、調査を担当した同市教委の田口一郎主査は「シカは当時、生命力の象徴とされていた。狩りの様子を埴輪で表現したのだろう。イノシシ埴輪と作り方がよく似ており、同じ工人が作った可能性が高い」と話している。

矢が刺さった動物が見つかるということは鹿は存在していて、狩りをしていることから鹿を食べていたことが考えられた。また田口一郎主査が「～作り方がよく似ており、同じ工人が作った可能性が高い」とおっしゃっていることから、工人によってつくられる埴輪の種類も形も変わってくるのだと知った。見た目は現代の鹿とあまり変わらないと感じた。

これらのことから動物の見た目は当時の見た目と現代の見た目とで変わりはないことがわかった。見た目の違いがないとわかるのは埴輪が当時の動物の見た目を忠実に表現しているからだということがわかる。今に当時の様子を知ってもらうために作ったものではないと思うが、ここまで忠実に表現していることは当時の様子をするための大きな手がかりになるので、今埴輪からわかっていることも他の埴輪が出てきたときに違う意味になるとかまた違った説がでてくるかもしれないので楽しみだ。

## 1-5 まとめ

今回、埴輪から見える当時の様子、を調べてみてわかったこととして、一つ目は埴輪は大きく分けて5種類あり一つ一つ丁寧に作っていたということ。二つ目は、様々な形がある中、すべて丁寧に忠実に表現していて当時の様子をわかりやすく表しているということ。三つ目は楽器やアクセサリーはこの時代にも存在していたということ。四つ目は動物の見た目やアクセサリーの形は現代とあまり変わらないが、髪型は大いに変わっているということである。当たり前だが現在のおしゃれと当時のおしゃれは違うけれど根本的なものは変わらないのかなと感じた。それは、ネックレスやイヤリングなど形は変わりがないものが多かったからだ。

社会の授業の際に先生が「歴史は今に繋がっている」とおっしゃっていたのを思い出し、今回当時の様子について調べてわかったことと今とでは家の形や、動物の容姿、アクセサリーの形などはあまり変わりがなく、繋がっているなど実感した。



保渡田古墳群やかみつけの里博物館で埴輪の実物をみたとき、思っていたよりも大きかったのとこんな大きいものをたくさん作っていたというのは大変な作業であったのかなと思った。かみつけの里博物館はたくさん埴輪が並んでいて、当時の埴輪の説明が書いてあるものが多く、レポートを作るために大変役に立った。今回はわたしは保渡田古墳群、かみつけの里博物館を選んだが群馬県にはたくさん古墳があるので違う古墳も見学してみて、違いを見てみたい。また、今回当時の様子を推測するために参考にした埴輪の種類が少なかったためもっといろいろな埴輪を見て、着目点を変え、また違った当時の様子も推測できたらと思う。これからも群馬県の埴輪の魅力を伝えるためにまずはわたしが埴輪について詳しくなって魅力を伝えていきたい。

## 【 お気に入りの埴輪紹介 】

わたしのお気に入りの埴輪は猿の埴輪だ。なぜお気に入りかは元々子猿を背負っていたということを知り、可愛いなと思ったからだ。

伝茨城県行方市の大日塚古墳から出土したもので重要文化財となっている。猿を表した埴輪は、非常に珍しい存在。元々は子猿を背負っていて、Y字状にその痕跡が残っているようだ。顔面などには赤色顔料が残り、生き生きとした母猿の表情を捉えた傑作。

やはり今と見た目変わらず今見ても猿とわかるほど現代の猿と変わらない見たいをしている。

他にもお気に入りの埴輪を見つけていきたいと思う。



## 【脚注及び参考文献】

- ・ウィキペディア「埴輪」
- ・福島文化財センター○白河館 まほろん「埴輪ってなに？」
- ・佐賀県立九州陶磁文化財 やきものいろいろ「やきものを作る原料と道具」
- ・高崎市ホームページ「保渡田古墳群」
- ・群馬県ホームページ「もっと埴輪や古墳について学んでみよう！」
- ・コトバンク「野見宿禰とは」
- ・百舌鳥・古市古墳群「こどもQ&A」
- ・コトバンク「角髪」
- ・○アスカディア・古墳の森 大阪府立近つ飛鳥博物館「古墳時代のくらし」
- ・文化遺産オンライン